あなぐら
―生意気なデカケツ美少女が
当局に反逆して投獄される
ディストピア風のエロ小説―
作 湘南てぇ
絵 マルカキスト

第Ⅰ話　モグラの収監

護送車の乗り心地は最悪だった――。

座席はプラスチック製の板だけであり、おまけに山道を走っていたのか、震動が激しくお尻に響く。わたしたち受刑者を積んだコンテナは金属音がうるさいし、鉄の錆びたにおいが鼻につく。

そんな環境で、コンテナ内はすし詰めの狭さ……。常に隣の受刑者の手足がぶつかり、互いが互いのパーソナルスペースを犯しあう。

もともとコンテナに窓はないのだが、各々が頭に麻袋をかぶせられて視界を遮断されていたことも大きなストレスだった。もちろん、手首と足首につけられていた鋼鉄製の枷も不快感を募らせる大きな原因の一つだ。

まさにこれは奴隷船だ――。

三時間の輸送が終わり、一人ずつコンテナから降ろされたときには、お尻がかなり痛くなっていた。イスに座るときはやわらかいクッションを敷いてばかりいたわたしにとって、この痛みは非常に大きな象徴的意味をもっている。

Sample

順番にコンテナから降ろされて、外の冷たい空気が肌に触れる。麻袋を通してでも、周囲が緑や土に富んでいることがにおいで分かる。でも、それは爽快感のある自然のにおいというより、どこかじめっとした青臭さに満ちていた。

遠くの方で鳥の声が聴こえる。鳥の鳴き声自体は何もめずらしいものじゃない。でも、今までの都会暮らしで一度も耳にしたことのない鳴き声を聴くと、自分は一体どこへ連れてこられたのかという不安が胸をざわめかせた。

「――全員、前へ進めっ！」

高圧的なかけ声があり、手枷に繋がれた鎖がぐっと前へ引かれた。

受刑者たちは鎖で連結されている。わたしの手枷から伸びる鎖は、前を歩く受刑者の首輪に繋がれている。同様に、わたしの首輪と後ろの受刑者の手枷が、一本の鎖で結ばれている。こうして受刑者たちの数珠が作られ、わたしたちは全員で一匹のムカデのようになって歩いた。

よたよた、ふらふらとわたしは行く……。

どのくらいの歩幅、どのくらいの速度で歩けばいいのかが分からない。前にいる受刑者との距離がどのくらいあいていて、左右にどんな障害物があるのか分からな

Sample

い。一歩先の地面に隆起があったり、くぼみができていたりしても、何一つ分からない。

（――怖い……）

視界を遮（さえぎ）られた状態の歩行がこんなにも不安定だとは知らなかった。

もしかすると、足が引っかかってこけてしまいそうな植物の蔦（つた）が目の前に横たわっているかもしれないし、一歩先には断崖絶壁があって、わたしたち受刑者は一人ずつ墜落死させられているのかもしれない。考えれば考えるほど、足もとに用心深くなればなるほど、不安が胸をしめつける。

背中を丸めて歩くのは猿みたいだと思って、わたしはいつも凛と胸を張った気品ある姿勢を心がけていた。だから、こんなふうに肩をすくめ背を丸め、一歩一歩おびえながら足を踏み出すような自分自身に、わたしは耐えがたい情けなさを感じてしまう。

こんな些末な事柄から、思いがけず自分の臆病さを知る。わたしの人生を一つ一つ築いてきた誇りや気品が、視界を奪われたというだけことで、容易に恐怖に屈してしまうことに落胆する。

Sample

踏みつぶされた蛙のような汚い悲鳴が、わたしの喉から飛び出した――。

「ぐえッ、ぐへえぇッ……!!　くッ、かはッ、あがッ……!!」

「ふんッ――!!」

「ぐげぇえぇ～～ッ……!!」

家畜をシメて殺すように、わたしの首に巻きついた腕がさらに太く力みあがった。メキメキと音が鳴りそうなほど、眼下で大きく盛り上がる筋肉。それがわたしの気道を絞め、頸動脈を絞め、顎を下から強く押し上げる。一瞬で息ができなくなり、わたしは今日こそ殺されるんじゃないかと気が気でなくなった。首につけられた首輪は鋼鉄製だったが、小さすぎてわたしの首を守る盾にはなってくれない。

「――この穀潰しがぁッ!!　当局に生かしてもらっている分際で、お前はこれっぽっちのお礼奉公もできんのかッ!!」

わたしの首を絞めあげている堂前カツマサが、耳もとで鼓膜を破ろうとするかのような大声で怒鳴る――。

Sample

わたしの綺麗な、かわいい顔が、こいつのモノを舐めるための舌にされている。顔にチンポのにおいをつけられ、マーキングをされている気分。

「この落ちこぼれがッ！　少しでも手抜きをしたら、お前なんぞ、すぐにでも処刑台へ送ってやるからなッ！」

「ふッ、ふぅッ……くうぅッ……！」

「命乞いをせよ」

「うぅ、ぐッ……!!　ふぅ、はぁ……こっ……殺さないで、くださいっ……。許してくださいっ……命だけは、助けて、くださいっ……。何でも、します……言うこと聞いて、オチンポ様、舐めますっ……。だから、殺すのだけは、どうか……。殺さないで……助けて、くださいっ……。べぢょおむぢゅッ、ぢゅばべろぢゅちゅッ、むぢゅッ、ぢゅばべぢょべぢょれろぉッ……!!」

「ふんッ、無様なやつだ――」

なんと言われようと、わたしは惨めなフェラチオをやめなかった。本当に、わたしは無様なモグラだった……。

それからしばらく、わたしは顔面フェラをさせられ続けた。唾液とカウパー汁が、

Sample

しかかられ、わたしは押し潰される。彼と比べて、いかに自分が小さな身体なのかを実感させられる。

わたしは彼が続けてセックスするつもりなのだと悟った――。

「おい、キスだ。唇をよこせっ――」

「やっ、いやッ……んむぐッ！♥ んんっ、んむちゅッ、むちゅんちゅちゅぱっ！♥ むちゅっ、ちゅぷちゅぱ、むちゅッ、んむちゅっちゅぷっ、んちゅっ！♥ んんぅーッ……！♥」

顎をつかまれ、力ずくで奪われる唇。タバコのにおいがぷんと香る。

わたしは首をひねって後ろを振り返り、堂前は前のめりになって覗きこむようにする。わたしたちの顔は突きあわされ、唇どうしで接触する。

当然のように舌がねじこまれて、ディープキスに口の中が騒いだ。こんな男と舌どうしを舐めあうなんてしたくないのに、わたしは気弱な少女のように目を閉じて、求められるがままに舌に舌を合わせ続けた。

「んんむちゅっ、ちゅぷっ、ちゅぱむちゅちゅぱぁっ！♥ んんんぅ〜〜っ……

Sample

Character

Sample